



第 22 号

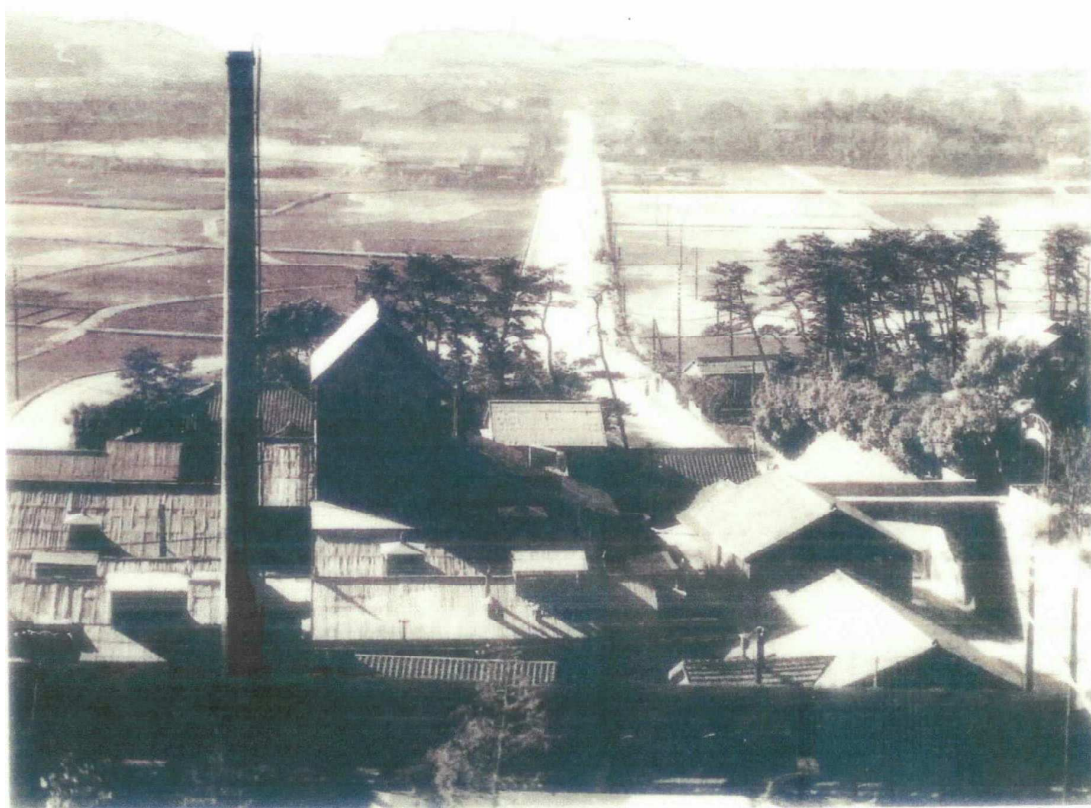
2011年3月31日発行

藤 沢 市 文 書 館
 〒251-0054 藤沢市朝日町12-6
 TEL 0466-24-0171 FAX 0466-24-0172

藤沢市文書館 検索

<http://www.city.fujisawa.kanagawa.jp/>

市役所望楼から南の方面を見る(佐藤 清氏提供)



上の写真は、今から約 60 年ほど前に、市役所本館にある望楼から、南の方面を撮影したものです。東海道本線を挟み、煙突のある施設が「トミー」と呼ばれた工場、南に延びる道路が町田県道(現在の国道 467 号線)です。この写真ではよくわかりませんが、晴れた日には江の島が見えたようです。

この当時は、日本が敗戦から 6 年余りを経過した頃です。朝鮮戦争による特需などで日本経済は復興しつつありましたが、東海道線の南部は畑や水田が広がる、のんびりした光景が広がっていました。(中村)

も く じ

市役所望楼から南の方面を見る	1
藤沢近代史話 幻のカルチャースクール.....	2

古記録を読む 第2回.....	3
古文書の読み方 第22回.....	4

藤沢近代史話 幻のカルチャースクール — 鵠沼自由大学について —

敗戦後、鵠沼で在野の文化人主導による新しい試みが、1946（昭和 21）年 7 月に行われました。それが「鵠沼自由大学」です。

鵠沼自由大学の発起人となったのは、平凡社や中央公論社の出版企画に関わり、後に明治大学教授となった評論家の林達夫と、大正末から戦時中にかけて「第一書房」という出版社を経営していた長谷川巳之吉でした。そのことを林達夫は『第一書房 長谷川巳之吉』（日本エディタースクール出版部、1979 年）の中で、「世の中が突然大きく方向転換して、新しい闊達な道を世の人は探し求めようとしていたが、丁度その矢先に出現した、これはカルチャル・ソサエティーとでもいうべく、それは法に縛られる学校ではなくて自主的勉学の場所であった」と、この学校の本質を述べています。

寒川町の寒川文書館には、公民館関係資料の中に「鵠沼自由大学夏期講座」という活版印刷のチラシが保存されています。それによれば、湘南学園で 7 月中旬から 1 か月以上にわたり行われたこの講座には、一流の文化人が揃っていたことがわかります。林達夫をはじめ、村岡地区に住んでいた女性運動家の山川菊枝、鵠沼地区に住んでいた流行作家の邦枝完二、東大西洋史の助教授で、後に世界史教科書の執筆者として名を馳せる村川堅太郎など、そうそうたる人々の名前が見られます。たまたま文化人が戦争による疎開で鵠沼周辺に身を寄せていたということだったにしても、これだけの講師陣を揃えている市民講座は、現在でも他には見いだせないでしょう。しかも、これらの講師たちは、すべて手弁当で講義を担当したのでした。

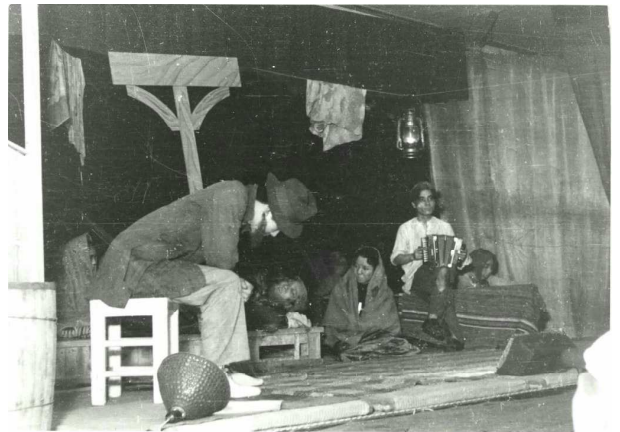
右上の写真を見ても、多くの人たちがこの自由大学に参加しています。当時の人たちが、いかに知的好奇心が旺盛だったかが、うかがえます。

その他で好評だったアトラクションは、芥川比呂志が演出した、チェーホフの「熊」だったようです。出演は芥川を中心とした新演劇協会のメンバーでし



鵠沼自由大学であいさつする長谷川巳之吉
（福地 誠一 撮影、福地 美沙子 氏 所蔵）

た。上演により、多くの人々に新劇の面白さを感じさせただけでなく、まだ無名の演劇青年だった芥川が、隅におけない演出家であることを示したのもありました。



人気のあった演劇の一コマ。出し物の中には、
芥川比呂志などが関わったものもあった。
（福地 誠一 撮影、福地 美沙子 氏 所蔵）

なお、鵠沼自由大学については、当館では写真の複製のほかには残念ながら記録が残っておりません。鵠沼自由大学についての資料をお持ちでしたら、あるいは、実際にこの講座に参加された方がいらっしやいましたら、文書館にご一報いただければ幸いです。（伊井）

（参考：高野 修「史料は語る 鵠沼自由大学のこと 藤沢市教育アーカイブズだより(73)」『ふじさわ教育』第 154 号所収、藤沢市教育文化センター、2010 年 11 月）

古記録を読む 第2回

源頼朝の死をめぐる(上)

★はじめに

源頼朝(みなもとのよりとも)といえば、鎌倉幕府を開いた人物として知られています。しかし、彼の死については、さまざまに取りざたされている問題があります。

『国史大辞典』(吉川弘文館)には、

『吾妻鏡』その他の比較的信頼できる史料によれば、頼朝は、稲毛重成の亡妻(政子の妹)の追福のため相模川に架橋したとき、その落成供養に出席した帰路、何らかの原因で落馬したのが死因とされている。

と記され、「落馬」死因説をとっています。

しかし、頼朝の死については、取り上げる記録により、内容に相違があります。そこで、頼朝と同時代に生きた貴族の日記などを用いて、頼朝の死を巡る記述について紹介していきたいと思います。

★「猪熊関白記」の記述をめぐる

まず、12世紀から13世紀にかけての社会を知る上で根本史料とされる『猪熊関白記(いのくまかんぱくき)』第3巻の建久10年(1199)正月の記述を見えます。この中では、

18日 前右大将頼朝卿依飲水重病、去11日出家之由世以風聞

20日 前右大将頼朝去13日早世云々

と記されています。

この中にある「飲水の重病」とは、一節によると今の糖尿病であったとされています。

この日記の筆者である近衛家実(このえ いえざね)は、京都の六条猪隈小路にあった邸宅猪隈殿から猪熊(猪隈)関白と呼ばれました。承久3(1221)年に発生した承久の乱では後鳥羽上皇らの挙兵に反対しました。そのため一時期役職を解任されましたが、乱の後に復権し、後高倉院と鎌倉幕府を協調させて、朝幕関係修復に努めました。

家実は鎌倉幕府の信任も厚く、幕府と近い関係にありました。そのため、頼朝の病状などを聞くこと

ができたのではないかと思います。

ただし、18日の本文の記述「依飲水重病」を「飲水によって重病となり」と読めば、頼朝は何者かに毒を盛られたという解釈も可能になると思います。

★藤原定家と「明月記」

次に、宮廷歌人・藤原定家(ふじわらのていか)の日記である『明月記(めいげつき)』を取り上げます。定家は中堅の貴族として生まれ、後鳥羽院歌壇の中心として『新古今和歌集』などの撰者として有名です。彼の日記である『明月記』は、源平の争乱から承久の乱に至る動乱の世を物語る第一級史料です。

20日 前將軍去11日出家、13日入滅。大略
頼病歟

とあります。

この「頼病」という語は、急病のことで、頼朝の死因が急病の可能性も否定していません。

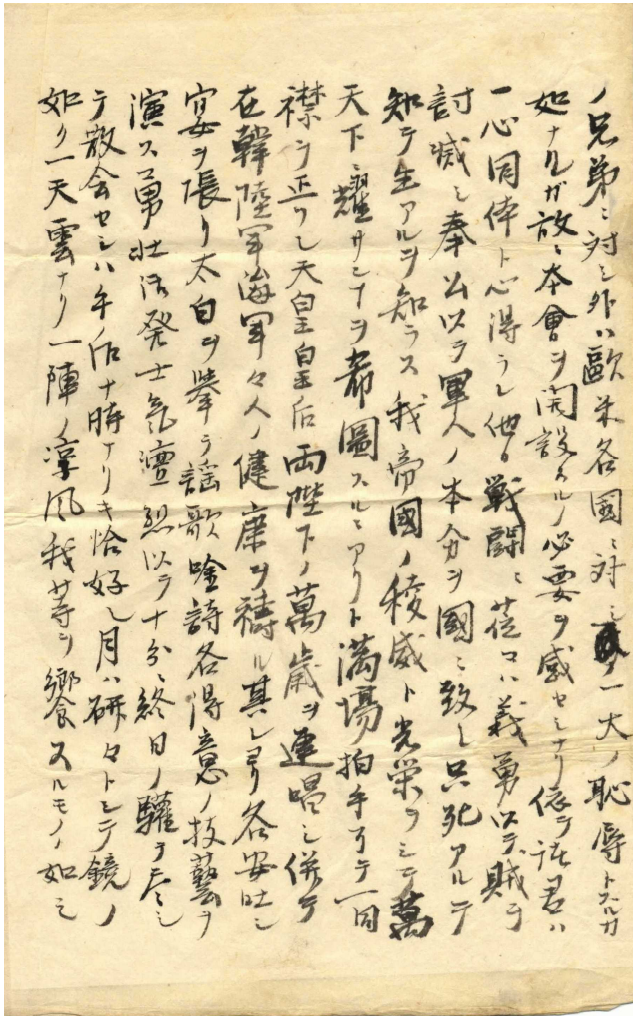
このように頼朝の死の直後に記された公家の日記からは「落馬」という言葉は出てきません。通説では、頼朝の死因が「落馬」になっているにもかかわらず、「病死」(あるいは毒殺)を推測できるような記述が残されています。

それではなぜ「落馬」説がでてきたのでしょうか。そこで、次の回では、幕府の公式記録である『吾妻鏡』を調べたいと思います。

なお、引用した資料については、『大日本史料』(東京大学出版会)で見ることができます。(伊井)

『大日本史料』とは

平安時代から明治維新に至る980年間の歴史事項を、記録や古文書を中心に編さんされた日本史の基礎資料です。これは『六国史(りっこくし)』(『日本書紀』など6冊の歴史書)の後を受けて、1901(明治34)年から現在に至るまでの国家修史事業の一環として、東京大学史料編纂所から刊行されている史料集で、一つのことからについて、信頼すべき複数の古記録から関係記述が転載されています。



資料の2頁目

資料の2頁目の釈文

ノ兄弟ニ対シ外ハ欧米各国ニ対シ一大ノ恥辱トスルカ
 如ナルガ故ニ本会ヲ開設スルノ必要ヲ感セシナリ依テ諸君ハ
 一心同体ト心得ラレ他日戦闘ニ莅マハ義勇以テ賊ヲ
 討滅シ奉公以テ軍人ノ本分ヲ国ニ致シ只死アルヲ
 知テ生アルヲ知ラス我帝国ノ稜威ト光荣ヲシテ万
 天下ニ耀サンコトヲ希図スルニアリト満場拍手ニテ一同
 襟ヲ正クシ天皇皇后両陛下ノ万歳ヲ連唱シ併テ
 在韓陸軍海軍々人ノ健康ヲ禱ル其レヨリ各安吐シ
 宴ヲ張り太白ヲ挙テ謡歌吟詩各得意ノ技芸ヲ
 演ス勇壮活発士氣凜烈以テ十分ニ終日ノ驩ヲ尽シ
 テ散会セシハ午后十時ナリキ恰好之月ハ研々トシテ鏡ノ
 如ク一天雲ナク一陣ノ淳風我等ヲ饗スルモノノ如シ

【前回の問題】 上の写真は、「明治村予後備役軍人ノ一大決心」の2頁目の文章ですが、参加者たちは宴会前に、2つのことを行いました。一つは「在韓陸軍海軍々人ノ健康ヲ禱ル」です。もう一つは何でしょうか。

【解答】「天皇皇后両陛下ノ万歳ヲ連唱」でした。

【解説】バンザイと発音するようになったのは、明治憲法発布日の明治22(1889)年2月11日に、青山練兵場での臨時観兵式に向かう明治天皇の馬車に向かって唱えたのが最初だといわれています。呼び方についてはさまざまな検討がなされたのですが、謡曲・高砂の「千秋楽」の「萬歳楽(バンザイラク)には命を延ぶ」に合わせ、漢音と呉音の混用を問わずに「万歳(バンザイ)」とされました。(中村)

参考文献：牧原憲夫「万歳の誕生」(『思想』845号、岩波書店、1994年)

編集後記 社会教育の一端をになうものとして、現在盛んに行われているのがカルチャースクールです。多くの方々が何らかの形で参加されていると思いますが、敗戦直後の藤沢においても、その先駆け

と思われるものが実在しました。それが、鵜沼自由大学です。若き日の芥川比呂志なども参加したこの企画について、資料を探しています。お心当たりの方はご一報をお願いいたします。(中村)